



↑ BC 付近から見たメラピーク

新年度短信発行によせて

桜門山岳会理事長 古野淳

3月は関東甲信地方を中心に、関東から九州にかけて記録的な高温でした。100年以上の観測で1番暖かい3月となったところも。今年の桜は記録的に早い開花となったところも多かったようです。

しかし、1~2月は冷え込んだ日が多かったようです。JAC山岳研究所の気象観測ロボットによると、最低気温は 1/5 7:00 -23.7 、 2/12 5:30 -21.2

2/17 6:30 -20.7 12/27 3:00

-19.9 2/26 6:30 -19.8 の順で、例年以上に冷えしました。

2月8日~12日の間、ウインター・クライマーズ・ミーティング(WCM)のお手伝いで山研に入っておりましたが、下山の朝は-21.2度。上高地はもともと降雪も少なく、超低温による自然が織りなす景観はすばらしいものでした。今冬はJACの講習会も多く、ほぼ毎週末雪の山に出かけました。東京からわずか数時間で5メートル以上もある積雪のある山を楽しめる環境は、世界でも類がありません。剣、穂高、白馬、谷川、月山・鳥海山。。仕事を終えて週末は銀世界へ。こんな至上の楽しみをOBになって、歳を重ねても楽しめるのは山岳部で経験を積ませて頂いたことに他ならぬ、山岳部に感謝。学生達にもこの喜びを共有してもらいたいと期待します。

さて、最近5年間の卒業生はわずかに7人でした。進路は民間企業1名、警察2名、消防2名、教員1名。日本経済失われた20年を象徴する傾向がここにも垣間見えます。それでも今年卒業した飯田君は油に乗った今、就職せずに、90周年にはぜひヒマラヤへと夢に向かって登山を継続しており、なんとか実現させてあげたいと思います。

今春は2つの春山合宿が行われました。ひとつは北鎌~笠縦走。そしてもうひとつはネパール・メラピーク。1年生3人を含む学生5人と大谷監督とでヒマラヤの6470mに挑戦。3月では登山には時期が早過ぎることもあり、山頂を踏むことはできませんでしたが、3人の1年生にとってはたいへん貴重な体験になったことでしょう。ぜひ90周年にはさらに大きなヒマラヤをめざしてくれるに違いありません。今春新社会人になった横山君、関君もはりきって仕事に向かうことでしょう。

昨今の登山、スキー技術や装備には目を見張る変化があります。ここ2~3年のことかと思えます。アイスアックス(ピッケル)のピックは氷に刺すだけでなく岩に引っかけて登ります。ロープは60mが主流となり、ダブルロープ(ドッペル)は8mmの細さです。スリングは極細ダイニーマ製。カムは極小サイズまでさまざまなものがあります。夏山縦走路でもヘルメットをかぶる登山者が増えました。山スキーは、新雪、ザラメ、ゲレンデを自在に滑れるロックスキーが人気です。スキー人口が減り続けた要因の1つにカービングスキーの普及がヨーロッパより大幅に遅れたことが指摘されています。短期間で滑れるようになるスノーボーダーは増えてましたがスキー人口の減少を補完するには遠く及びません。スイスでは通貨高でスキー客は減りましたがスキー人口が減ったわけではなくオーストリア、フランス等ユーロ圏にシフトしただけです。日本の長い不況で若者が経済的にスキーを避けた可能性はありますが、こんなに恵まれた自然環境でありながら中途半

端になってしまったスキー文化の原因はどこにあるのでしょうか。

ちなみにスキー人口は、オーストリアが 340 万（人口の 55%）、スイスは 200 万以上（人口の 25%）。日本では 1993 年の 1860 万をピークに減少。スノーボード人口の増加や 1990 年代より慢性的に続く暖冬傾向による雪不足も相まって、2000 年代前半には 800 万人を割るなど約 10 年で、ピーク時の 3 分の 1 にまで減少。中高年層が多くを占めるようになり、若者のスキー離れに歯止めがかからない状態です。

ヨーロッパの登山ガイド達(UIAGM)は、夏はハイキングやクライミング。冬は全員がスキーガイドです。日本では戦後、登山とスキーが完全分離され、それぞれに進化していった歴史がありますが、そもそもフィールドは同じです。スキーヤーにとってバックカントリーは雪山登山者のもの。逆に登山者はゲレンデに行きたがりません。不幸としか言いようのない文化摩擦です。ゲレンデで練習しなければバックカントリーに入れないし、雪山技術を習得しなければスキーヤーはいつまでも「ゲレンデ」から出ることができません。

しかしながら、オフピステを楽しむ若者は多く、バックカントリーも着実に増えています。メディアの報道のありかたにも問題はあります。コース外滑走禁止エリアの滑りは「サイドカントリー」と呼ぶべきで、「バックカントリー」と混同しています。そもそもバックカントリーにリスクはつきもので、雪山登山と同レベルに報道すべきです。

先述の WCM の同行は刺激的な経験でした。山研をベースにしているので日帰りクライミングなのですが、そのひとつ、皆明るいうちに行動を終了させる気がないのです。夜でもヘッドランプで行動できるのなら深夜まででも行動し、翌朝また出かけるという、経験と体力がなければできないクライミングです。明神南壁や東壁の垂直の氷柱を夕方になってももう一本というように我々にとっては信じられない行動です。山野井泰史氏いわく、「48 時間は睡眠も食事も取らずにクライミング出来る体を普段から作っている。」そうです。ピオレドールクライマーはそんな中から何人も出ております。

山岳部の学生にそのようなリスクなクライミングは望みませんが、卒業後は世界一流のクライマーを目指す「馬鹿者」が現れることも期待して、新しい仲間が増えることに期待します。

学生山行報告

平成 24 年度 冬山合宿

場 所) 北アルプス

期 間) 平成 24 年 12 月 26 日～1 月 3 日

メンバー) 4 年 CL 飯田祐一郎

3 年 SL 関洗哉、横山裕

2 年 山浦祥吾

1 年 池田祥子、賀来素直、金原守人



↑ 宮城ゲートから中房温泉まで 13km の道のり

12 月 26 日 新宿（高速バス）～松本駅 晴れ

穂高行きの終電に間に合わなかった為、松本駅にてステビバを行う。

12 月 27 日 松本駅～穂高駅（タクシー）～宮城ゲート 晴れ

朝出発準備を行っていると、一年生の賀来が個人装備であるジャケットの忘れに気付く。予定を変更し、松本駅周辺の登山道具店にてジャケットを購入したのち、穂高駅に向かう事にする。ジャケット購入に時間がかかった為、宮城ゲート過ぎの沢沿いにて天幕する。

12 月 28 日 宮城ゲート～中房温泉 曇り後雪 宮城ゲート～中房温泉

食当の寝坊により、出発が 1 時間遅れる。有明温泉手前から一年生の池田が体調不良を訴える。

体調不良が収まらないので、中房温泉にて天幕を行う。一昨年に比べ、中房温泉周辺の雪は少ない様に感じられたものの、夜からまとまった降雪が始まる。

12月29日 停滞 晴れ

昨夜の降雪により、テント周辺は20センチ程雪が積もっている。前日の池田の体調不良が収まらない為、本日も停滞を決める。日が昇るとだんだん雪が融けてきて、お昼頃には昨夜の雪がほとんど融けていた。また、お昼を過ぎるとだんだんと登山者が増え、テントは8張りほどに増えていった。

12月30日 中房温泉～燕山荘 風雪 -5

中房温泉～第1ベンチ～富士見ベンチ～合戦小屋～燕山荘

燕山荘のテント場が混雑する事が予想されたので、計画よりも1時間早くに中房温泉を出発する。合戦小屋にて、アイゼン・ヘルメット・ハーネス、目出し帽・ゴーグル・グローブを装着し、池田と飯田はタイトロープにて行動を行う。森林限界を超えると一気に風雪が強まる。合戦沢ノ頭を過ぎ、しばらく歩いていると、池田の唇にチアノーゼの症状が見え始める。燕山荘手前150～200m程になると、足取りも重く唇の色ははっきりと変化が見られるようになってきた。この時点で飯田・池田ペア以外のメンバーはだいたい先に行く。しっかりと確保をしながら持てる力を最大限に出し、燕山荘を目指す。燕山荘までは終始トレースがあり、ラッセルはほとんどナシ。燕山荘に到着すると、しばらく休憩したのち池田を山荘に残し、残りのメンバーにてテント設営を行う。テント設営を終了する事には池田の調子も安定する。天気図を見る限りしばらくは不安定である事が分かる。

12月31日 停滞 暴風雪 -20

朝から暴風雪となり、停滞を決める。私達の他に2張りあったテントは午後には撤収していた。夜まで風・雪が収まらない。

1月1日 停滞 暴風雪 -19

引き続き暴風雪。明日の朝に燕山荘を出発出来ない限り、計画の完遂は不可能となる。

1月2日 停滞 暴風雪 -20

引き続き暴風雪。計画の完遂が不可能となり、今後の行動を考える。今後の天候や予備日を考えて、前進しても大天荘までが限界となる。また、明日の朝に燕山荘を出発出来ない場合、大天荘まで前進する事も不可能であり、また、その場合は予備日が1日余るものの、テントの耐久性や天候を考え、余程の強風でない限り下山をする事にする。

1月3日 燕山荘～中房温泉～宮城ゲート 風雪

前日より安定してるものの、引き続き風雪の為、下山を決める。テント撤収に時間がかかる。富士見ベンチに着く頃には一瞬晴れ間も見えたものの、依然天候は不安定なままだった。中房温泉までは順調に下り、林道を通り14時頃宮城ゲートに到着する。



総括

今回の冬合宿の敗因はどこにあったのだろうか。合宿が終了した今、この問いが頭から離れない。

賀来のジャケット忘れに始まり、池田の体調不良。そして、近年まれに見る悪天候。この他にも様々な要因が重なり、燕山荘からの敗退という残念な結果となった。その中でも、賀来のジャケット忘れや池田の体調不良といった問題は、直接的な山の技術といった事ではなく、事前準備の段階で防ぎきれなかった問題であった。

また、この2つのアクシデントにより、晴れ間の2日間を停滞してしまった事が非常に悔やまれる。そして何よりも、これらのアクシデントを引き起こしてしまった原因の大部分は、やはり上級生にあり、事前に防ぎきれなかった自分達に苛立ちを感じ、そして悔しく、なんとも情けない。

燕山荘での3日間の停滞では、生活技術の向上に努め、また、1年生は初めて本格的な停滞を体

験した。停滞 2 日目になる頃には集中力が切れ始め、1 年生は計画の完遂こそは出来なかったものの、今までの山行とは一味も二味も違う山の厳しさを体感した事だろう。

このように、結果から見ると完敗に終わった今回の合宿だが、けっして何も得られなかった訳ではない。1 年生それぞれに反省と対策、そして得られたものがあり、これは今後も登山を続けるにあたって、非常に大切な事の塊であり、1 年生は今回の合宿で体験した事をゆっくりと整理し、そして今合宿を深く考えてみて欲しい。

冬合宿こそはこのような結果に終わったものの、2 月には八ヶ岳。そして、3 月にはネパールのメラピークが待っている。合宿が終わる度に思う事だが、次の山行に向けて再度気を引き締め 2 月 3 月に挑み、この数か月、いつも以上に集中していききたい。(飯田・記)

平成 24 年度 二月合宿

場 所) 八ヶ岳

期 間) 平成 25 年 2 月 11 日 ~ 2 月 16 日

メンバー) 4 年 CL 飯田祐一郎

3 年 SL 関洸哉、横山裕

2 年 山浦祥吾

1 年 池田祥子、賀来素直、金原守人、須郷直也、宝迫哲史

2 月 11 日 移動日 新宿 ~ 茅野駅

順調に新宿を出発し、茅野駅に到着する。茅野は冷え込み、早くにシュラフへとモグリ込む。

2 月 12 日 茅野駅 ~ 行者小屋 晴れのち雪

美濃戸口 ~ 南沢小滝 ~ 行者小屋 BC

明け方、茅野駅にてマイナス 12 と非常に冷え込む。時間があるので南沢小滝にてアイスクライミングの基礎を勉強する。最終的には全員がトップロープで 1 回づつ登攀を行う。行者小屋には東京農大・東海大が天幕していた。終始トレースがあり、快適に行者小屋まで歩けた。夜からは吹雪き始め、雪が積もる。

2 月 13 日 分散登攀 1 日目 飯田・宝迫 風雪

行者小屋 BC ~ 赤岳の稜線分岐手前 ~ 行者小屋 BC ~ 阿弥陀岳北陵取り付き ~ 行者小屋 BC

昨夜の降雪により、BC 周囲は 30 センチほど雪が積もった。歩行に不安があるので、赤岩の頭往復を止め、ルートの把握がしっかり出来ている赤岳にて歩行訓練を行う事とする。宝迫と赤岳の稜線分岐手前まで行動を行ったのち、風雪が強くなったので帰幕する。赤岳往復を終えた残りのメンバーと BC にて合流したのち、阿弥陀岳北陵取り付きまで移動する。阿弥陀岳北陵取り付きからは FIX 訓練を行う為に、登下降を合わせて 4 ピッチロープを伸ばす。

2 月 13 日 赤岳(関・横山・山浦・池田・賀来・金原・須郷)

行者小屋 BC (-9) ~ 赤岳 (-15) ~ 行者小屋 BC

空はどんよりとした雲に覆われている。昨夜からの降雪により 30cm ほど積もり、トレースは消えてしまっている。森林限界を超え、斜面が急になりはじめてから池田のペースが遅くなる。キックステップが決まらず苦労している。稜線分岐に到着するも相変わらず視界が悪く、風も強い。降り積もったさらさらの雪が風で飛び散り、ゴーグルを着用しなければ目が痛い。鎖場を慎重に通過し、赤岳山頂に到着する。風も視界も良くないため、周遊は断念し、同ルートを下降する。下降中、10 時過ぎから一気に青空が広がり始め、晴天になる。もうちょっと早く晴れてくれればと思うが、仕方がない。それにしても八ヶ岳の全貌は美しく周遊はとても面白そうだ。途中、阿弥陀北陵を眺め、ルートを偵察した。



2 月 14 日 分散登攀 2 日目 飯田・池田・宝迫 晴れ

行者小屋 BC ~ 赤岳鉱泉 ~ 硫黄岳 ~ 赤岳鉱泉 ~ 行者小屋 BC

赤岩の頭まで様子を見ながら行動をする。池田・宝迫共に良く歩けているので、結果的に硫黄岳

まで足を伸ばした。ルートはエアリア通りではなく、赤岩の頭手前から 40 分程トラバースし、さらに硫黄の稜線を目掛けて 30 分程直登した。この間は終始ラッセルで、アベレージ膝上、最大で胸近くまで雪が積もっていた。オーレン小屋分岐に突き上げたのち、硫黄岳目掛けて稜線を進む。硫黄岳に到着する頃には風が強くなり、そうそうに下山を開始する。下山は池田・宝迫をタイトロープし下山する。赤岳鉱泉にてお湯を沸かし、温かい紅茶を飲みゆっくりと休憩する。

2月14日 阿弥陀北稜(関・横山・山浦・賀来・金原・須郷)

行者小屋 BC (-9) ~ ジャンクションピーク ~ 登攀開始 ~ 第1岩稜 ~ 第2岩稜 ~ 阿弥陀岳 ~ 行者小屋 BC

昨日からの晴天が続き、快晴である。文三郎尾根との分岐で中岳沢へと向かう。中岳沢を10分ほど進み、尾根へと取り付く。胸以上のラッセルもあり、思うように進まない。JP手前の急斜面を登り、灌木帯となっている所からロープを出し、FIXで登攀した。

1P目(45m) 山浦(リード)

灌木帯の斜面を直上する。下部は灌木帯のため、支点は十分にある。灌木帯を抜けると、やや斜面が急になる。ピッケルとアイゼンを利かせて登る。後ろから花谷泰広さんが2人組で登ってきていた。

2P目(25m) 横山

第1岩稜まで、のっぺらとした雪稜を進む。

3P目(15m) 関

6人のFIX通過は時間が掛かるため、花谷さんに先を譲る。第一岩稜はやや左側から取り付く。支点が頼りないため、ハーケンを打ち込む。岩壁はガバが多く足を慎重に置いていけば問題ない。雪とミックスになっている箇所は、ピッケルを使わないと少々いやらしい。

4P目(20m) 横山

岩と雪のミックスのフェイスを直上する。ランナーを取る箇所がなく、怖さを感じる。1年生は慎重によく登れている。

5P目(40m) 山浦

このピッチが一番画になるところだろう。2mほどの岩壁を越えたあと、ナイフリッジとなる。赤岳、横岳をバックにリッジを登る。西側は雪庇となっており、やや東側を進みスノーバーで支点を構築した。登攀を終了し、100mほど進み阿弥陀岳の頂上を踏む。赤岳をバックに頂上で写真を撮るが、どこだかよく分からない。中岳のコルに下降し、中岳手前の尾根を進んでBCに到着した。



↑ 3ピッチ目。フェイスからの雪稜を山浦がリードで張る。(写真：雪稜、通過する賀来)

2月15日 分散登攀3日目 飯田・金原・宝迫 風雪

行者小屋 BC ~ 美濃戸山荘 ~ 行者小屋 BC

金原を美濃戸山荘まで連れて行く。帰りには吹雪となり、BC手前500mからはアベレージ腰上ラッセルとなった。宝迫の凍傷に注意しながら行動をし、11時にBC到着。周遊に向かっていた別働隊はすでに帰幕しており、停滞となった。

2月15日

行者小屋 BC (-8) ~ 赤岳手前稜線分岐 ~ 行者小屋 BC

一昨日のような天気だ。八ヶ岳を周遊する予定であったが、天気は一向に良くなる気配も無く、須郷もふくらはぎの痛みを訴えていたため、稜線分岐で引き返した。

2月16日 下山日 曇り

行者小屋 BC ~ 美濃戸口

順調に美濃戸口まで向かう。土曜日という事もあり、登山道では何人もすれ違い美濃戸口は混雑していた。

総括

今回の合宿では3月に行われる遠征に向けてのFIX訓練と歩行技術向上を目標としていた。結果

からみると当初の計画とは違い変則的な行動となったものの、目標を達成出来たように感じる。また、別働隊の宝迫は初めての合宿にして冬山という厳しい内容であったものの、非常に良く動いていた。硫黄岳に登頂出来た事は自信になったと思う。GW 合宿に向けて頑張ってもらいたい。遠征組は直接指導する事はなかったが、テントや食料を本番と同じように準備し、本番でのテント内と状況を似せ、一定の成果を得ているように見えた。遠征まで残り2週間を切った今、再度気持ちを入れ替え、全員登頂にむけて頑張ってもらいたい。(記・飯田)

平成24年度 春山合宿報告

山 域) 北アルプス 北鎌尾根～槍ヶ岳～中崎尾根
期 間) 平成25年3月11日～3月21日
メンバー) 4年 CL 飯田祐一郎、2年山浦祥吾



3月11日 晴れ 入山日

新宿～葛温泉～七倉温泉～高瀬ダム下 CS

時間もあり、天候も安定していたので高瀬ダム下まで移動する。終始雪はない。

3月12日 晴れ 高瀬ダム下 CS ～湯俣温泉手前 CS

高瀬ダム下 CS ～湯俣温泉手前 CS

高瀬ダム過ぎのトンネルを越えるとだんだんと雪が積もってくる。発電所近くからはズボ足ラッセルが続き、林道終了点手前からは沢に降り、沢沿いを歩く。沢沿いは多少雪がおちつくものの、ズボ足ラッセルは続く。湯俣温泉まで到着する事が時間的に困難な為、湯俣温泉手前にて天幕する。ラッセルは終始膝下程。

3月13日 曇り後雨 湯俣温泉手前 CS ～湯俣温泉 CS

湯俣温泉手前 CS ～湯俣温泉 CS

CS からは前日に引き続き川沿いを歩行する。本来のトレースを辿ろうとするものの、ズボ足が腰にまで達する為、断念。湯俣温泉に到着する頃には雨が降り出し、テントを設営する頃には大雨となった。

3月14日 曇り 湯俣温泉 CS ～東沢過ぎの高巻過ぎ CS

湯俣温泉 CS ～東沢過ぎの高巻過ぎ CS

湯俣温泉からは徒渉を繰り返しながら川沿いを歩行する。本来のトラバースや高巻は崖崩れや雪崩の跡が激しく、歩行を断念。6時間も徒渉を繰り返すと手足に冷えの限界がくる。よって東沢過ぎの高巻過ぎにて CS を張る。ラッセルはズボ足で終始膝上。



↑ 取り付きまでの渡渉。

3月15日 晴れ 高巻手前 CS ～P2 尾根取付き CS

東沢過ぎの高巻過ぎ CS ～P2 尾根取付き CS

相変わらずラッセルはズボ足で、終始膝下。トレースは以前に秋山・冬山合宿にて使ったものを忠実に辿る。ただ、千天出合の部分のみ高巻を行った。乾かし物をしっかりと行う為に P2 尾根取付きにて天幕する。

3月16日 雪 P2 尾根取付き CS ～P2 の肩 CS

P2 尾根取付き CS ～P2 の肩 CS

疲労が溜まっていたので出発を遅らす。相変わらずラッセルはズボ足で、終始膝上。多い所で腰近くのラッセルとなる。途中の木登り区間は予定通りにザイルを出し、山浦がトップをはる。風が強くなり、雪が激しくなってきたので、P2 の肩にて天幕。

3月17日 晴れ P2の肩CS ~P4・5の科尔CS、P2の肩CS 06:30~13:00P4・5の科尔CS

相変わらずラッセルはズボ足だが、だんだんと雪が締まってきた。しかし多い所で膝上はある。P3手前のルンゼ以降は1ピッチザイルを出す。12月よりもいやらしく雪が付く、緊張感あるリッジを進む。P3~P4までの稜線は所々雪庇が張り出しており、慎重にルーファイを行う。P4・5の科尔は12月よりも雪がしっかりと付いており、安定した天幕が行えた。V8テントでも3張りは安定して天幕が行えると思う。夜から雨が降り出す。

3月18日 雨 P4・5の科尔CS STAY

前日の雨が止まずに停滞。夏山に来たかのような猛烈な雨となる。

3月19日 曇り後晴れ P4・5の科尔CS ~独標過ぎの科尔CS

P4・5の科尔CS ~独標基部~独標過ぎの科尔CS

P6のトラバースは予想していたよりも雪が締まっており、順調に進む。トラバースに1ピッチ、ルンゼ登攀に1ピッチ、P6・P7の科尔に向けてさらにトラバース1ピッチザイルを出す。P6・P7の科尔からはさらに千丈沢側にあるルンゼに1ピッチ出す。P7からの下降は2ピッチ懸垂下降を行う。また、細い稜線が続く緊張を強いられる。北鎌の科尔は12月の方が安定していたように見えた。V4テントが2張り張れるかどうかといった所だ。P8までの登攀からは雪が締まっており、快適に進む。独標基部からは雪崩の危険が高く見られたので、直登を行う。10mほどトラバースしたのち、直登を開始する。1ピッチで核心部分は終了し、念のため稜線部分にもう1ピッチザイルを出す。独標頂上からはタイトロープで進み、天幕地を目指す。天幕地の科尔は去年の秋に行った残置回収地点だ。

3月20日 曇り後雨 独標過ぎの科尔CS ~槍平CS

独標過ぎの科尔CS ~北鎌平~槍ヶ岳頂上~槍ヶ岳山荘~千丈乗り越し~槍平CS

終始雪が締まっており、快適に進む。槍ヶ岳頂上直下の登攀はタイトロープで問題なく進む。千丈乗り越し手前から風が強くなり始め、乗り越しに到着する頃には立っているのもままならないほどであった。中崎尾根を急いで下り、槍平にて天幕。奥丸分岐手前からはズボ足ラッセルが始まり、時間がかかる。また、雪崩の跡があちこちに見られ、慎重に下降する。



↑ 槍ヶ岳頂上のふたり

3月21日 槍平CS ~新穂高温泉、槍平CS ~新穂高温泉

槍平から新穂高温泉手前までは終始ズボ足ラッセルで、雪は膝下程。

また、この区間には大きな雪崩の跡がなく、スキヤーのトレースが残っておりルーファイの手間が省けた。しかし最後までズボ足ラッセルが続き、非常に疲労とストレスがたまった。
(飯田・記)

総括

結果からみると今回の合宿は完遂とは至らなかった。笠ヶ岳までトレースを伸ばすという予定であったものの、中崎尾根下山となった。しかし、冬期における北鎌尾根への挑戦は今回で3度目となり、やっとの思いで北鎌尾根にトレースを残す事が出来た。また、その内容は雪が多く、尚且つズボ足ラッセルを強いられるというものであり、12月に挑戦した時よりも難易度は高いように思え、その点では満足のいく合宿となったと感じている。そして、北鎌尾根を完登した今、この尾根を学生が登攀する事の意味や意義を再確認する事が出来た。

核心部がそのアプローチ。すなわち P2 尾根取付きまでの徒渉にあると言われる程アプローチに時間を要し、また、P2 の木登りではラッセル力。そして、稜線部分では迅速なロープワークや適格なルートファイディングに始まり、好天をものにする為の体力が必要となってくる。これらは大学 4 年間の間に山岳部に在籍する事で得られたスキルの塊であり、4 年間の集大成を表現するにあたって、非常に適している山であるように感じた。また、北鎌尾根の厳しさを実感する事が出来た。

当初、北鎌尾根～西穂高縦走という計画から始まった今回の春山合宿であったが、北鎌尾根を完登し、その厳しさを実感できた今、昔、西穂高までさらに縦走を行っていた先輩方のその不屈の精神力や、無尽蔵とも思える体力に、ただただ脱帽するあまりである。また、そんな大先輩方に憧れを抱くと共に、4 年間の山岳部人生において私の目標であった北鎌尾根～西穂高縦走を完遂する事が出来なかった事が非常に悔しく思う。しかし、2 年生の山浦に北鎌尾根を体験させる事が出来た事は非常に意味のある事で、今後の彼の山岳部人生において大きな糧となると思う。(飯田・記)

個人山行

塔ヶ岳頂上へ向かう階段→

期 日) 2013 年 1 月 27 日

山 域) 丹沢 塔ノ岳～表尾根

メンバー) 関、横山、池田、賀来、金原、須郷

行 動) 大倉～花立山荘～塔ノ岳～烏尾山～三ノ塔～富士見山荘～ヤビツ峠～蓑毛



空は雲ひとつなく登山日和である。1 年生は大倉から冬靴を履いて出発する。1 年生を順番にトップを歩かせ、ペースを作らせる。駒止茶屋辺りから雪がちらほらと見え始める。多くの登山者で雪は固められており非常に滑りやすい。花立山荘手前で賀来がシャリバテになり、へとへとになっていたが、飯を食べたら回復したようだ。金冷シから雪はしっかりと積もっている。塔ノ岳までアイゼンは装着せず、キックステップで登る。



山頂は風もなく暖かい。富士山はもちろん東側にはスカイツリーも望むことができた。塔ノ岳からの稜線上はアイゼンを装着して進む。表尾根から塔ノ岳に向かう登山者も

多く、中には高校生と思われる 30 人程の団体とすれ違った。

烏尾山の休憩中に須郷のザックがベンチから泥に落下し、背負う側がひどく泥まみれになってしまう。ペーパーで応急措置して背負わせる。三ノ塔までひと登りして、富士見山荘へ下降する。最後は競争してヤビツ峠に到着し、バスを待つ。なかなかバスが来ないことを疑問に思っていると、バス停に「道路凍結の為、蓑毛までの折り返し運転となっています」と張り紙されていることに気づく。事前に確認しておけば、と思いながら嫌に長い林道を下って蓑毛に到着した。



(記・関)

場 所)群馬県 三国峠 三国山
期 間)平成25年1月31日
メンバー)LOB 船田、1年 宝迫
上越橋付近駐車場～三国峠～三国山～駐車場



高崎駅で宝迫をピックアップし船田の車にて三国峠を向かう。
天気図通り快晴である。悪くなりそうな気配すらない。

駐車場に着き、装備を整える。急に計画が決まったこともあり、宝迫はほとんど部の借り物だ。
上越橋と三国トンネルの間の脇道の登山道から登山開始となる。トップの私は一歩目で雪の締まり具合が小気味よく、今日は楽しめそうだと感じ、一方の宝迫はいきなりトラバースでおっかなびっくりの足つきだが、木につかまりながら通過する。そこを越えると、まるでゴールデンウィークの上越かと思わんばかりの雪質である。頂上までの間、あれこれ冬山の大変さを宝迫に伝えるが、ちゃんと伝えられているようには思えない。

頂上で眺めの休憩を取り、頂上から少し離れた景色のよいポイントへ行き、山並みと地図を宝迫に説明する。宝迫は北側の真っ白な万太郎や仙の倉を見て感心していた。初々しいものである。三国山からの下りは、なだらかな大きな斜面で危険要素がないので、直下降やシリセードで気持ち良く下山した。(船田・記)

総括

桜門山岳会の新年会で、宝迫を2月合宿に何とか参加させようということになり、部員育成の一翼を担う私に出来ることがあればと、私の予定を宝迫に突き付けたところ、平日であるがOKが出たので、計画した次第でございます。

宝迫は先日大谷監督と丹沢に行ったのみで、雪山に連れて行かねば2月は遠いと思い、またしても原澤OBに指南していただきました。突き付けた難題は、初心者で当日発日帰りでラッセルもあるけど、頂上が踏めて達成感があり、景色が良いという上越の山でした。

結果的に三国山は初心者にとって素晴らしい山でした。原澤OBには大変感謝いたします。ただ、前日、前々日の天気良すぎてラッセルのラ字もなかったのが残念でした。(船田・記)



↑左、宝迫。右、船田ヘッドコーチ

場 所)丹沢 檜洞丸
期 間)平成25年2月3日
メンバー)3年 関
1年 池田、賀来、金原、須郷、宝迫
OB 大谷監督
目 的)体力強化・靴慣らし
行 動)新松田駅～ゴウラ沢出合(5)～
檜洞丸(3)～西丹沢自然教室



大谷監督の車に乗せていただき、登山口に到着する。駐車場には予想以上に車が止まっている。荷物を重くするため、西丹沢教室付近の川岸から石を拾ってくる。大体20kgだろうか。ゴウラ沢出合まで淡々と進み、沢は飛び石をつたって渡る。梅雨時や雪解け時期には徒渉が必要だろう。ここから檜洞丸へと続く尾根の登りとなる。途中、雪が凍結している箇所もあり、木を掴みながら慎重に足を置いて登る。ゴウラ沢出合から45分

ほどで展望園地に到着する。この先、固い雪面のトラバースとなっているため、アイゼンを装着して進む。宝迫はアイゼン歩行が初めてのため歩きにくそうだが、最初はぎこちなかったが、足も引っ掛けることなく上手に歩いていた。

青かった空が石棚山稜分岐あたりから雲がかかり始めて白くなる。分岐からは緩やかな木道を通り、檜洞丸に到着した。山頂は10人ほどの登山者がいるのみで、やはり塔ノ岳に比べると少ない。皆で写真を撮り、来た道を下山するが、木道にアイゼンが刺さり転倒しそうになる。以降、気を付けて降りるが結構怖い。展望園地でアイゼンを外し、登山口まで一気に下った。(記・関)

場 所) 谷川岳

期 間) 平成25年3月8日～3月10日

メンバー) 宝迫哲史(1年)、古野OB、学習院大学4名、ガイド1名、JAC青年部1名

3月8日 移動日

長津田駅集合。車で谷川岳ロープウェイのりばに向かう。駐車場にてピバーク。

3月9日 晴 ロープウェイのりば～天神平スキー場～雪洞～谷川岳山頂～雪洞、ロープウェイのりば～天神平スキー場～谷川岳山頂～雪洞

ロープウェイを使い、天神平スキー場まで上がる。30分ほど移動して本部のテント設営を開始する。テント設営後、雪洞を作り始める。ガイドの方から作り方を教わり、3人で役割を分担し雪洞を作る。3分の1ほど終わった頃、翌日の天候を想定して、急遽谷川岳を目指すことが決まる。

学生5名、ガイド1名、青年部1名の計7名が、谷川岳の山頂を目指して出発。ハーネスとアイゼン装着。天候は晴れ、風は少し強め。顔の凍傷に気をつけるように言われる。雪の上は黄色っぽくなっており、ガイドの方曰く、中国から飛んできた黄砂だそう。頂上手前で休息。雪底に気をつけるよう指示がある。風がとても強かったためオキノ耳までは行かず5分程で下山を開始する。

雪洞まで戻り、少し休憩してから雪洞構築を再開する。当初3人で寝る予定だったが、隣の雪洞の場所が、運悪く水の通り道となっており、完成しなかったため6人で寝ることになる。日没前に6人が広々寝ることが出来る程の雪洞が完成する。日没と同時に6人が雪洞内に入り夕食。20:00就寝。

3月10日 雪訓～下山 曇り後雪 雪訓～下山開始～ロープウェイ乗場～解散

ビーコン搜索とロープワークについて学ぶ。昨日の読みが当たり天候が崩れる。下山を開始する。風が強く下山時には吹雪いており、視界が悪く慎重に下山する。ロープウェイ乗場に到着。14:00解散。

雪洞、掘削訓練→

総括

慣れないメンバーで山に登ることに、最初は不安であったが、とても楽しむことが出来た。雪洞やロープワーク、ビーコン搜索など講習会で得られる知識はとても多かった。またそれを実際に体験出来たのは自分にとって良かった。学習院大学の食事の準備やユニークな行動食など、日本大学とは違ったルールがあり、とても興味深かった。学習院大学の先輩方やガイドの方からは、様々なアドバイスをいただいた。まだ初心者である私にとっては、スキルアップにつながるばかりであった。今回の講習会で得たことを今後の活動で活かしていきたい。(宝迫・記)

↓谷川岳頂上



場 所)新潟県・神楽峰

期 間)3月27日

メンバー)原田(洋)OB、岡田OB、1年 池田

行 動)かぐらスキー場から山スキーによる神楽峰 2029m
の往復、リフト最高点～神楽峰山頂着～山頂駅～駐車場着

今回の山スキー山行は、山スキーをしてみたいと言っていた私に、原田会長が「行かない？」と声をかけていただきました。もともと、スキーを全くやった事のない私のために、3/11に八ヶ岳の蓼科スキー場で、岡田元監督と、岡田さんのご友人の横山さんとスキー訓練を行ってからの今回の山行となりました。



当日、東京は雨の予想でしたがスキー場は曇り時々晴れ。越後三山のとっぺんは雲に隠れていましたが、神楽峰は絶好の山スキー日和でした。暖かい日が続いていたのですが、先日からの寒さがあったためか、雪質はよく、しまった雪でした。しかもいつも、4、5月にしか動いていないという第五リフトが動いていたために、普段のコースを30分ほど短縮し、リフトを降りて、スキーのバックルを外し、シールを張って山スキー、行動開始です。

岡田さんから「かかとを上げるように歩くんだよ」と教えていただき、滑るように歩く。後ろ向き

に滑らない！と感動しながら登ると、どんどん傾斜がきつくなっていきます。さすがに登れなくなってくると、岡田さんから「斜めに登れ」と言われ、ジグザグに登って頂上へ。頂上で一服し、圧雪されていない斜面を斜滑降で下りました。

下りは登るより大変で、何度も転びながら、原田さんにも岡田さんにも助けていただきながら、よろよろと小屋まで下り、コーヒーを飲んでから、圧雪されたゲレンデを滑りました。

今回は初めての山スキーでしたが、原田さん、岡田さんに優しくご指導していただき、本当に楽しかったです。もっとスキーの技術をつけて、すいすい滑られるようになりたいです。ありがとうございました！（池田・記）



平成 24 年度 春山合宿 行動報告

山 域)ネパールヒマラヤ クーンブ山群
メラピーク峰

期 日)平成 25 年 3 月 1 日～28 日

メンバー)3 年 L 関 洸哉、SL 横山 裕
1 年 賀来素直、金原守人、須郷直也
監督 大谷直弘



クライミング・ガイド	サンタマン・タマン (38 才)	↑ BC にてメラピークをバックに、メンバー、
コック	ニマ・タマン (32 才)	サダー、ポーター集合写真
ポーター	アラム・タマン (35 才)	ラクマン・タマン (34 才)
	グルン (兼キッチンアシスタント・28 才)	プルバ・シェルパ (24 才)
	テンリ・シェルパ (22 才)	チリン・タマン (19 才)

3月1日 羽田空港集合

岡田元監督、古野理事長、斉藤コーチ、そして国内組のメンバー、ご両親方に見送られて出発する。

3月2日 羽田空港～カトマンズ

羽田空港 00:20～04:20（タイ）スワンナプーム空港～12:30（ネパール）トリブバン空港

タイで5時間ほど待ってネパールへと出発する。飛行機からヒマラヤの山々が望め、皆興奮する。ついにネパールに到着する、コスモトレックの事務所で今回我が隊のガイドを務めるサンタマンを紹介していただく。

3月3日 カトマンズ滞在

この日、ホテルにてサンタマンと装備等の打ち合わせをし、タメル地区で足りない装備の買い出しをする。ルクラへの飛行機は手荷物が15kgまでのため、超過する分の荷物（約30kg）を急遽先に空港に送ることとなる。

3月4日 カトマンズ～ルクラ 2850m カトマンズ 20 ルクラ 15

トリブバン空港 09:10～09:35 ルクラ

霧が濃かったため飛ぶか心配であったが、出発時間は遅れたがルクラへと出発する。北側には独特な形をした山が立ち並んでおり、さらに興奮する。プロペラ機は揺れながらあっと言う間にルクラの飛行場に降り立つ。

3月5日 晴れのち曇り ルクラ～チュタンガ 3300m 14

ルクラ 07:40～10:40 トックディン 11:00～11:25 チュタンガ

賀来は喉の調子が良くないようだが、行動に問題はなさそうだ。山々に朝日が差し込んでおり、ヌブラがとても綺麗である。サンタマンの話によると私たちがシーズンになり初めてメラピークを目指す登山隊のようである。

3月6日 晴れのち雨 チュタンガ～カルカテン 4100m～チュタンガ 5

チュタンガ 07:30～09:15 カルカテン 10:50～11:40 チュタンガ

賀来の体調は万全とは言えないものの、良くなったようである。賀来の荷物を軽くしてカルカテンへと向かう。ここからはクスムカングル・サウスの岩峰が見える。バットィでティーをいただき、高度順化のため、調子の悪い賀来を残して5人で少しだけ標高を上げる。積もっている雪はすね辺りまでといったところだ。午後からは次第に雲が多くなり、雨が降り出す。

3月7日 晴れのちあられ チュタンガ～カルカテン -2（出発前）

チュタンガ 08:25～10:15 カルカテン

二重靴を履いて出発する。ざらめ雪が積もっており、凍っていて神経を使う。しかしポーターは運動靴で50kg以上の荷物を背負って登る。12時過ぎからあられが降り始める。賀来が倦怠感を訴えており、体温も少し高い。このまま標高の高い所にいても良くはないと考え、賀来をルクラまで下ろすことになる。大谷監督、コックのニマ、ポーター一人が賀来に付き添い14時に出発する。

3月8日 晴れのち曇り カルカテン -2

カルカテン停滞（順化行動 4300m地点往復）

サンタマンの携帯を借りてルクラの大谷監督と連絡を取る。賀来の体調は良くなったそうだが、大谷監督は賀来をカトマンズに戻す手続きをしてからカルカテンに戻るとの連絡を受ける。私たち4人は高所順化のため、峠の下まで向かうこととする。後からツエトラやコテ、タナなどのロッジのオーナーが登ってくる。シーズン到来か、仕事始めで峠を越えるそうである。今回我々の隊がメラピークではファースト・パーティーになる為、ガイドのサンタマンがキャラバンルート上の各ロッジのオーナーに店開きをするように手配をしてくれたとのこと。

15 時頃、大谷監督たちがカルカテンに到着する。ちょっとお疲れのようである。

3 月 9 日 晴れのち曇り・あられ カルカテン～ザトルワ峠 4590m～ツエトラ（チュリカルカ）4280m - 2

カルカテン 08:15～10:00 コル～11:20 ザトルワ峠～12:15 ツエトラ

アイゼン、ピッケルを身に付け行動を開始する。昨日より雪が締まっている。峠へのトラバースはトレースもしっかりしており、FIX を張る必要はない。トラバース箇所は小さなデブリの跡があり、雪が大量に降った後は怖いところだろう。過去にポーター6 人が雪崩に巻き込まれた死亡事故もあった箇所だ。緊張のトラバースを終え、急斜面を直上する。コルを越えて南側の斜面を1 時間ほどトラバースし、ザトルワ峠に到着する。

3 月 10 日 霧のち雪 ツエトラ～コテ 3680m - 1.5

ツエトラ 08:05～10:15 タクトック 12:05～13:15 タシンディグマ～14:35 コテ

朝から霧である。昨夜の雪で 5cm ほど積もっている。出発から 30 分くらいで横山が気持ち悪さを訴える。ツエトラからひたすら下り、ヒンクー川沿いを進むとコテに着く。夕方には雷も鳴り始める、毎日寒い季節は春に変わり始めているのだろうか。

3 月 11 日 曇りのち雪 コテ - 2.5

コテ停滞

一昨日、前日と行動がハードであったため、ポーターの休養また、横山の下痢の具合も良くないのでレストとする。昨夜、横山は吐き気で何回も目が覚めるほど苦しかったようである。ジアルジア症の可能性があるため、フラジールを飲んで休養する。

3 月 12 日 晴れのち曇り コテ～タナ 4356m 2

コテ 08:10～10:15 ゴンディシュン～12:20 タナ

横山は1 日休んだことで体調は良好である。メラピークを目の前に、川岸を進む。雲一つなくとても良い天気である。途中からキャシャールやクスムカングルなど、堂々とした姿を見せる。タナも大きな村で、木もない荒涼とした雰囲気のある場所に色鮮やかな石積みのロッジが何軒も並ぶ。

3 月 13 日 晴れのち曇り タナ～4650m 地点～タナ 2.5

タナ 08:00～10:25 4650m 地点 10:50～12:05 タナ

昨日に続き良い天気である。金原は空身で順化する。10 年くらい前に崩壊したという湖の前を横切り、ヒンクー川右岸側から徐々に高度を上げる。背後にキャシャール、クスムカングル、右にはメラピーク北峰と素晴らしい景色である。ディグ氷河が開けた、4650m 辺りまで順化する。

3 月 14 日 晴れのち雪 タナ～カーレ BC4900m 3

タナ 08:05～11:15 カーレ BC

昨日と同じルートを進む。メラピークやクスムカングルの方でアイスブロックが崩壊し、雪崩が発生している。昨日の折り返し地点を過ぎ、丘を越えるとカーレが見える。BC からはコックのニマが料理を作ってくれ、昼食には太巻きやみそ汁など日本料理がでる。午後は高所順化のため、裏にある尾根を高度 5130m まで登る。Malanphulan (6573m) など格好の良い山々が見渡せる。

3 月 15 日 晴れのち雪 カーレ BC～5300m 地点～カーレ BC - 6

カーレ BC 08:00～10:35 5300m 地点 10:55～12:05 カーレ BC

メラ・ラまで高度順化の予定である。二重靴を履き、アイゼン、メット、ハーネスを携行して出発する。氷河へは岩場沿いに巻くようにして取り付く。ここを越えると、メラ・ラまで平坦な道が続く。現在地の標高(5300m)とメラ・ラの標高はほぼ変わらないので下山を開始する。11 時前、山に雲がかかり始める。1 時間くらいで BC に到着する。午後には毎度の雪が降る。

3 月 16 日 晴れのち雪 カーレ BC 3

カーレ BC 停滞

体を休めるため BC でレストする。午前中 AC の食糧と装備をチェックする。その後近くの斜面でアッセンダーの登攀と、懸垂下降の練習をする。サンタマンの情報によると、今年は雪が多くファーストサミットはまだされておらず、AC から上部はトレースも無いとのことである。また本当かどうか分からないが、胸まで雪が積もっている箇所もあるそうだ。

3月17日 曇りのち雪 カーレ BC ~ AC5850m - 8

カーレ BC08:05 ~ 11:10 メラ・ラ ~ 14:35 AC

空には薄い雲がかかっている。私たちは個人装備とバイル、薬袋、ツエルト等少しの共同装備を持って出発する。氷河の舌端を登り終えた頃から雲が湧き始め雪となる。メラ・ラに行く途中で視界が悪くなり、クレバスの間を縫う様にして登る。AC の設営目印である大岩は近くに見えるのだが、歩いてても歩いてても辿り着けない。雪も風も強くなってきており、精神的にも体力的にもつらい。やっとの思いで AC に着いたのは、出発から 6 時間半後である。テントは関・大谷監督、横山・金原・須郷、サンタマン他ポーターで分かれる。アラムとラクマンの二人は BC へと戻っていった。夕方、サンタマンから相談がある。AC から上はトレースが無く、ラッセルが予想されるため時間がかかる。天候が崩れるのも早いため、登頂は難しいと言われる。時間短縮のため、強いメンバーだけで行くのはどうかという提案もされたが、仮に頂上まで行き着かなくても、メンバー全員で登頂を目指すことにする。

19 時頃、サンタマンから悪い知らせが入る。BC に戻る筈のポーター 2 人（アラムとラクマン）がホワイトアウトでメラ・ラから先に進めなくなってしまう、AC に返ってきたようである。その内の一人であるアラムが体調不良で吐いてしまっており、また、滞在予定であったもう一人のポーターも高度障害で嘔吐が酷いとのことである。2 人を無事に BC へと下ろすため、登頂は断念し全員で下りることになる。私たちメンバーの順化が上手くいっていただけに残念である。

3月18日 晴れのち曇り AC ~ カーレ BC - 14

AC06:25 ~ 08:45 カーレ BC

朝はとても天気が良い。ニマを先頭に下る。メラピークを背に下りるのは悔しい。しかし、風雪を上げるエベレスト、ローツェやマカルー、Peak41 など、とても素晴らしい景色であり、スケールの大きさに息を呑む。ニマはこの景色を味わう時間を与えてくれない程の速さで駆け下りていく。昨日とは対照的に、あっという間に BC に着いてしまった。ポーター 2 人の体調に問題はないようだが、アラムの右足のくるぶしより上の辺りが、靴擦れにより皮が剥けてしまっている。応急措置をするが、大分痛そうである。

3月19日 晴れのち曇り カーレ BC ~ タナ - 8

カーレ BC08:35 ~ 10:10 タナ

出発前、メラピークをバックにポーター含め全員で写真を撮る。足の怪我をしている アラムは個人ザックのみで出発する。タナに到着し、昼食を食べてコテに向かおうというところ、アラムが痛くて歩けず、他のポーターに背負ってもらっているとの連絡が入る。自力で歩くことは出来ないため、明日ヘリコプターでピックアップしてもらうことになる。ヘリコプターの手配の為に行動停止となり、タナで泊ることになる。

3月20日 晴れのち曇り タナ ~ コテ ~ タクトーク 3700m - 4.5

タナ 07:55 ~ 10:20 コテ 12:05 ~ 13:20 タシンディグマ ~ 14:25 タクトーク

アラム、ニマと別れ出発する。9 時過ぎに谷沿いから救助ヘリコプターがやって来る。一瞬の内に私たちの上空を通り過ぎる。コテ近くの崖沿いはやはり落石があり危険である。コテにて昼食をいただく。下流側から雲が湧き出て、出発する頃には霧になる。

3月21日 曇りのちあられのち雪 タクトーク ~ ツエトラ 1

タクトーク 06:50 ~ 10:40 ツエトラ

チュタンガを目指して早めに行動を開始する。朝から雲がかかっており、天候は悪くなりそうだ。ツエトラに到着し、時間の都合上、今日はツエトラ止まりとなる。昼過ぎから一気に天候が崩れ始め、大粒のあられが激しく降り、雷も鳴り始める。16 時頃には止むが、その後雪となり外は一面雪景色となっていた。サンタマンの具合が悪く体温を測ったところ、38 度の熱があったため、風邪薬を直に飲ませる。

3 月 22 日 晴れのち曇り ツエトラ～ザトルワ峠～ルクラ - 1

ツエトラ 06:55～08:30 ザトルワ峠～09:10 コル～10:10 カルカテン～11:30 チュタンガ～11:45 トックディン 13:30～15:10 ルクラ

サンタマンの熱は 38 度で昨日と変わらない。行動可能か確認したところ何とか動けるとのこと、様子を見ながら進むことにする。ザトルワ峠に向かって白一色となった道を登る。ザトルワ峠を越えると、懐かしいヌプラやコンデリが姿を現す。ルクラまでの道のりはシャクナゲがいくつも咲いており、とても綺麗である。ルクラは 18 日前よりも品揃えが多く、これからシーズンの到来である。

3 月 23 日 晴れのち曇り ルクラ 8

ルクラで 1 日滞在。散策するもすぐに飽きてしまう、のんびりと過ごす。

3 月 24 日 晴れのち曇り ルクラ～カトマンズ 9

ルクラ 09:00～09:40 カトマンズ

寂しい気もするが、ルクラを離れカトマンズに到着する。やはりカトマンズは暑い。ルクラの静けさから打って変わってカトマンズはクラクションの音が鳴り響く。カトマンズでは元気そうな賀来と再会、タメル地区のフジホテルにチェックインをする。

3 月 25 日 晴れ カトマンズ

カトマンズを観光する。

3 月 26 日 晴れ カトマンズ

各自ゆっくりとした時間を過ごす。外はお祭りのため賑やかである。

3 月 27 日 晴れ カトマンズ～バンコク

柳原さんと飛行場にて別れを告げ、ネパールを発つ。

3 月 28 日 曇り バンコク～成田空港

成田空港にて山浦が出迎えてくれる。合宿も終わり、ここで解散する。

報告者：関 洸哉

3 月 17 日の行動と 18 日以降の行動判断について

17 日の行動概要は前述の報告の通りであります。

17 日、A C への到着後 2 人のポーターがホワイトアウトの中、メララ付近の雪原帯をリングワウンデリングをして約 3 時間後の午後 6 時過ぎに B C に帰幕できずに A C に登り返して来た。午後の 7 時前にサンタマンが血相を変えて大谷・関のテントにやって来て、B C に下したポーター 2 人（この二人は元々荷上げのみで同日 B C へ下る予定）が A C に戻って来た。更にこの二人については、悪天候の中で 3 時間超の行動をしていた為に一人が疲労でシリアスな状態になっている。また、A C 泊の予定でいたポーター 2 人の内、一人も吐き気が続き、そのポーターも状態は良くないと報告に来た。

2 人の状態を考えると、明日のアツクは無理なので下山をさせてくれとの申し出である。

大谷がサンタマンとポーターの居るテントに様子を見に行き、状況を把握する。

B C に帰幕できなかったポーターの一人はかなり弱っているように見えたが、後から考えれば、この時点でよく遭難をしないで A C に戻って来てくれたものと思う。

戻って来たポーター二人分のシュラフが無いと言うことで、大谷のシュラフと厚手のダウンジャケットを手渡す。

また、医療用酸素については、夜間に2人のポーターの具合が更に悪くなった場合には使用しても構わない旨をサンタマンに伝える。

大谷・関については関のシュラフを掛布団のようにして広げて寝たが、寒くて眠れない一夜になった。

18日、ACを撤収しBCに帰幕後、サンタマンと残りの予備日2日を使って、明日の19日に再度ACに行動できないか打診する。

サンタマンの見解は、昨日のリングワンデリングでシリアスな状態と報告したポーターの一人が足を負傷しているから歩行が困難との報告を受ける。

凍傷かもしれないから至急ルクラに下したいとのこと、またこのポーターについては荷物を運ばせることが出来ないの、他のポーターに荷物を割り当てなくてはならない。

よって、帰りのキャラバンは日程通りに帰れない可能性が大きいので登山の継続は難しい

とのこと。ルクラーカトマンズのフライト日程は絶対に変更はできないので、予備日の2日間は帰りのキャラバンにも必要と言うことであった。

上記の報告を受け、慌てて大谷がサンタマンとポーターの足の状態を確認しに行く。両足の踵の上の皮膚がめくれ上がり、患部が炎症を起こして黒く腫れ上がっている。

元々、登山ブーツが合っていない上に3時間以上も彷徨を続けていたために、傷は深くないにしても踵部分はかなり広範囲に渡り皮膚がむけてしまっている。黒くなった患部について、サンタマンが何回もこれは“フローズン”(凍傷)ではないか?と聞くので、これは凍傷ではないと説明する。

関部員を直に呼び、応急の処置を二人で施す。

処置後、他のポーターに両肩を抱えられてポーター用のロッジに引き返して行った。下山を決定したが、足を負傷したこのポーターは翌19日の下山中に歩行が困難になり、他のポーターに背負われてタナまで下山し、更に翌20日、ヘリコプターにてタナからルクラまで緊急搬送に至った。19日は11時から全行動が停止し、ヘリコプターの手配や荷物の回収に追われることになった。

今回、17日に至るまで、午後になるといつも天気が悪くなり、雪が降るパターンが続いた。ACに上がる日も、それ以降の悪天に備えて学生には地図とコンパスは必ず携行するように大谷から指示を出した。悪天での撤退時や、アツタクの帰りには必ず午後になるので、ガスや降雪で視界が悪くなるのが容易に予想できたからである。

しかし、まさかポーターの荷上げ後の下山までは考えが及ばなかった。また、持たせていたとしても地図とコンパスを使えるかは怪しいと思うが、遭難対策上せめて赤旗をメララの雪原帯にしっかりと立てておくべきだったと反省をした。ポーターが、赤旗を辿ってBCまで下山できていればと.....悔やんでも悔やみきれなかった。

“是非もない”では済まされない痛恨かつ決定的なミスだった。

危険個所のマーキング用に赤旗を用意して携行していたが、事前の打ち合わせで、サンタマンからACより上にヒドンクレバスがあるとのことだったので、それ以外の場所はノーマークであった。ルクラ到着後、負傷したポーターは病院での診察を受け、大事に至っていないとの報告をサンタマンから受けた。

報告者 監督：大谷直弘

賀来部員（１年生）の途中離脱について

７日～８日の行動概要は前述の報告の通りであります。

７日、当初の体調不良（倦怠感と軽い下痢）は一過性のものと思い、ルクラ休養の後に大谷と１名程度のポーターで本隊に追いつけば何とかなると考えた。

カルカテンの高度（４１００ｍ）に滞在して休養していても、快方に向かうとは考え難かったので、コックのニマとポーターのチリンを伴い同日カルカテンからルクラへ４人で下山した。ルクラに近づくに従い、賀来の倦怠感は酷くなり、１０分歩いて１５分休むようになり日没ギリギリにルクラのホテルに到着できた。

賀来はホテルの階段も登れない状態になっており、ニマと二人で何とか部屋まで運ぶ。

ベッドで横になってからも足の浮腫みを訴え始め、以降の登山活動は困難と判断した。

この間、もし引き続き賀来の状態が悪く、大谷がカトマンズや東京まで同行を余儀なくされた場合、本隊をルクラまで戻して学生とガイドのサンタマンのみでゴーキョ、カラパタール方面に転進できるか否かを、コスモトレックの柳原氏と夜まで打ち合わせを行った。

翌８日、朝起きてみると賀来の体調は昨日よりは良くなっていたが、下痢は継続しているとのことであった。賀来と話をし、カトマンズに戻り静養することを決めた。昨日と異なり、大谷が同行しなくても一人でシッカリ歩くまでに回復してきたこと、カトマンズまで戻れば外国人専用の病院があること、柳原氏がカトマンズで受け入れをして頂けることなどを踏まえ、賀来一人分の航空チケットを手配するようにニマに依頼する。ちょうどパサン・タマン氏がルクラに滞在中とのことだったので、何とか手配をしてくれることになった。

８日の朝、ルクラの飛行場で賀来のキャンセル待ちに入った。チケットを手配して貰ったパサン・タマン氏にも飛行場で会うことができ、お礼を言う。柳原氏にもカトマンズの飛行場でのピックアップを依頼する。搭乗手続きが開始されると賀来に別れを告げて、ニマとチリンを伴い本隊の待つカルカテンへ急ぎ登り返した。

賀来の体調不良の原因である倦怠感（７日は歩行が出来なくなる）、両足の浮腫み、以降暫く続いた下痢の各症状については原因が掴めないままに治ったとのことだった。

結果として、賀来には大変申し訳ないと思いつつ登山計画を進めて行っていたが、２４日にカトマンズで賀来が笑顔で本隊を迎え入れてくれたこと、体調が戻って元気に復活していたことで、隊として、そして私としても大変救われる思いであった。

報告者 監督：大谷直弘



↑ 氷河に入ったところで、順化を終え一度 BC へ



学生の山行計画

GW 合宿

山 域) 北アルプス 剣岳・立山

期 間) 平成 25 年 4 月 29 日(月)～平成 25 年 5 月 6 日(月)

移動日 1 日、実働 6 日、予備日 1 日

メンバー) 3 年 CL 山浦祥吾、2 年 賀来素直、金原守人、須郷直也、宝迫哲史、OB 関洸哉

日程(予定)

4 月 29 日 新宿(高速バス)～富山駅

30 日 富山駅～室堂～雷鳥沢～劔沢 BC 1

5 月 1 日 劔沢 BC 1～雪上訓練場～劔沢 BC 1

2 日 劔沢 BC 1～雪上訓練場～劔沢 BC 1

3 日 劔沢 BC 1～一服劔～前劔～剣岳～前劔～一服劔～劔沢 BC 1

4 日 予備日

5 日 劔沢 BC 1～劔御前～雷鳥沢 BC 2

6 日 雷鳥沢 BC 2～雄山～別山～雷鳥沢 BC 2～室堂

エスケープルート) 劔岳 劔沢 BC 1～劔岳→同ルート下降

立山 雷鳥沢 BC 2～雄山→同ルート下降 雄山～真砂岳→大走り

危険箇所・対策

場所	危険	対策
雷鳥沢	雪崩	慎重に通過
前劔～劔岳	滑落・転落	ロープを出す
雷鳥沢～一ノ越	道迷い	コンパスの使用
雄山～富士ノ折立	滑落・転落・雪庇	慎重に通過・積極的にロープを出す
別山付近	雪崩	直登

東京連絡所) 大谷 直弘監督、船田 良 HC

現地連絡所) 富山県警察本部 様

遭難対策) 携帯電話で連絡。つながらなかった場合、トランシーバーにて連絡。

事故発生→自力搬出可→自力下山→東京連絡所→各家族

新人入部状況

水越健輔 文学部 教育 1 年
 篠崎さやか 理工学部 応用化学 3 年
 山県 巧 法学部 公共 1 年
 加藤 純 法学部 新聞 2 年



↑ キャンパスで勧誘の様子
 大型のパウチポスターは大谷監督が作製したもの。

以上 4 名、入部の意思ありと言うことで保険の手続きをします。
 その他、HPを見て問い合わせってくる学生が十数名います。

平成24年度 理事・評議委員会報告

2012年12月28日(金) 古野事務所(参加者:原田、大谷、古野、若林)

短信・新年会案内発送手配

2013年1月29日(火) 千石フェニックス(参加者:原田、高澤、大谷、古野)

- 1) 学生の冬山参山行報告
- 2) 学生の八ヶ岳計画(2月)
- 3) ネパールメラピーク春山合宿について
- 4) 蓼科スキー懇親会について

2月21日(木) 千石フェニックス(参加者:原田、大谷、古野、学生3名)

- 1) 学生の八ヶ岳山行報告
- 2) 国内春山山行:北鎌~西穂(飯田、山浦) 宝迫の谷川天神平研修
- 3) 春山ヒマラヤメラピーク合宿:募金状況、高山病・緊急対応等
- 4) 短信162号発行について

4月1日(月) 千石部室(参加者:高緑、原田、大谷、古野、若林、学生山浦)

- 1) 学生の春山山行報告(北鎌~中崎尾根)
- 2) 学生の春山合宿メラピーク報告
- 3) 学生の5月山行計画(別山~劔岳)
- 4) 新入部員募集計画
- 5) 5月の総会について(5月30日木曜日18:30~主婦会館プラザエフ)
- 6) 部創設90周年行事について



「アンテナ」

訃報

大谷正吉 OB(機17卒)が2012年10月22日、老衰の為に逝去(93歳)されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。連絡先は、大谷加代子様

菊池典男 OB(歯10入部)が2013年1月30日、ご逝去されました。関西の方々とは特に親交が深かったと思います。心からご冥福をお祈り申し上げます。連絡先は御長女の大谷洋子様。尚、住所・電話番号は不明。

平成24年度 桜門山岳会総会のご案内

日 時 5月30日(木) 18時開場
場 所 主婦会館プラザエフ 7Fカトリア
〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 番地
最寄駅 JR 四ッ谷駅 麴町口 徒歩1分

時 間 総 会 18:30~19:20
懇親会 19:30~21:00

尾上昇 OB（昭和40年卒業）
春の叙勲 平成25年4月29日付
旭日小綬章の授賞が決まりました。

桜門山岳会会員、一般社団法人 日本食品機械工業会 会長である尾上昇 OB（昭和40年卒）の長年にわたる功績に対し、この度春の叙勲で授賞されることが決まりました。

会員の住所変更のお知らせ

野中有美子

太田 毅

加納崇史

短信編集事務局より 近藤隆志 OB、篠崎泰徳 OB、浜大剛 OB、山本泉 OG の宛先が不明として郵送物が事務局まで返送されてしまいます。各氏の現住所をご存知の方は編集委員（若林 090-1204-0352）までお知らせ頂ければ幸いです。

OB 動向

2013年度スキー懇親会開催

本年2月16日（土）～17日（日）中川ご夫妻の御好意に甘え白樺湖啄木鳥山荘にて第三回目のスキー懇親会が行われた。今年は雪が多くゲレンデスキーはもちろんのこと、車山からのスキーツアーも楽しめた。中川OBの手配で金曜日から参加のOBはきりたんぽ鍋を満喫、ストーブ談議が弾んだ。今年は遥々四国から山平OB、新潟から風巻OBも参加、事務方としては嬉しい限り。



グリーンランド在住の大島OBより原田宛てにアザラシの毛皮が送られて来たので此の機会に皆さんに披露、毛皮を広げて記念写真を撮る。大島OBから良いアザラシの毛皮が獲れたので学生さんにスキーのシールとして使用出来るか試してほしいとのコメント。

今の時代、ナイロンシールなので加工するだけでも可也の費用がかかるかも。何方か加工出来る工場をご存知の方原田まで一報下さい。また、今年も山本（晃）OBから2万円及び多くの参加者から差し入れ等がありました。事務方としまして厚く御礼申し上げます。（原田・記）

参加者：山本（晃）、大城、高橋、森山、山平、中川、平戸、古畑、原田、大谷、風巻、古野、学生8名。以上、参加者20名。



「温故知新」 ～ 山やの履歴書 ～



私の登山・戦後～現代編

「終戦後食料について芸北スキー」

本片山 数雄（1939年入部／専経）

以前、日本山岳会の総会において本片山OBがスピーチを依頼され、そこでお話された内容が日本山岳会の広報誌に掲載されました。この度、「温故知新」は発行元の日本山岳会広島支部にご了解を得て、その時の講演会の書き起こしの後編を掲載させていただきます。

終戦後、世の中が混沌としている中では定職もなく、しかし私の山好きは続いていました。広島県の逓信局に勤める先輩（管内の郵便配達員にスキー講習を企画する人）から昭和23年正月に「八幡高原に行こう」と誘われてお伴をしたことがあります。郵便車に便乗し、戸河内経由で松原に泊まり深入山の東・おしろい谷をラッセルして道戦峠を越えよもぎ旅館に泊まりました。夜はそばを食ベドブロクの接待です。当時、宿代として米が不可のため小豆などめぼしい食料品をかき集めリュックに詰めて山に出かけていました。恐羅漢山から聖岳の麓の雪道を進み中の甲の一軒家に立ち寄り、暗くなったナツヤケノキビレを越え、横川の下部の宿で寒い夜を過ごしたのち内黒峠を下手法スキーで越えて帰っていました。

それから数十年、正月になると恐羅漢に通い詰めることになります。常宿は上前です。そこで広島山岳会の連中と知り合いました。その中にいつも鎮座する人がいました。JAC広島支部の松島宏さんと話していたら「それは私の父です」と言われました。やがてその会の例会に参加するご縁ができました。

竜王山、比婆山などの冬季スキー行が思い出に残ります。六ノ原を通り出雲峠を越え、吾妻山から森脇へと下って泊まりました。三倉岳合宿では玖波から峠を越え長い道のりを歩きました。山頂でアップザイレンをおこなう時、私は肩がらみでしたが、この会に三好さんというダンディな方がおられて股がらみをやられるのには驚きました。まだハーネスがない時代です。のちの広島県山岳連盟会長です。ある時、単独でスキーの帰りに内黒峠を下っていたら、短いスキーを右肩にして登る人を見かけました。この人が加藤武三氏だとあとで知りました。このころ青木巖さん（JAC広島支部）がクライマーとして活躍されていた頃であり、「広島山の会」が発足したことも聞きました。

やがて私の所属する日大山岳部のOBと交流が始まり、昭和49年6月初旬の立山集会に参加しました。アルペンルートが開通され、楽に入山できる時代を実感しました。佐伯文蔵氏の経営するロッジに泊まり、解散後私たち元気な者は乗鞍に上がり剣岳に再見しスキーをしました。登山スタイルだった私はそのあと単独で登山をしました。西穂高岳をきわめ上高地に下りて帰りました。

会社勤めが決まり、それからは休日の山行だけとなりました。昭和56年に定年となりここで復活登山の相棒が出来、より活発な登山が始まりました。

例えば正月登山では干支にちなんだ山行をしました。猿喰山から始め、虎年には光市に土地の人がつけた虎ヶ岳なるものを見つけて登りました。一連の山行は福山の蛇円山で終わりとなりました。

高速道路の開通に合わせて遠出もしました。5月中旬、八方尾根から唐松小屋に泊まり、翌日は強風のため五竜岳を中腹で中止とし、遠見尾根を下山、引き続き木曽駒ヶ岳に登り中津川溪谷を見て帰ったことがあります。

80才になり、今一度高い山へと秋の常念岳に単身で出かけたことがあります。その時、常念小屋が創立80周年記念に当たるからと小さい木札に焼印したものをいただきました。私の生まれ年に先代が建立されたものと知り感慨深いものがありました。ただし夕食の豚カツに食欲がわかず翌

日蝶ヶ岳へ向かうもののへばり、常念小屋に引き返しました。向こうから女性の方が「ストックをお使いください」と声をかけていただきました。翌日松本に下りレンタカーを借りて妙高に向かいました。

振り返ると山行は定年後から充分時間がとれるので行きやすいと思います。私の場合は延べ約500日間になったでしょうか。ヒマラヤやスイスアルプスツアーにもものめりこみました。

昔は7月下旬でも北アルプスは残雪が豊富でネールブーツにピッケルが必要でした。現在は残雪が少なく岩石の崩落も激しく登山道も荒れているように思います。九州の英彦山に2月に行ったときは逆に山頂に積雪を見ました。軽アイゼンで下りてくる登山者に聞くと「九州の山は粘土質で滑りやすいから必要です」と言われました。東北地方にも近年たびたび行きました。山には樹木が豊富ですが山頂に登ると岩屑が多くて歩きづらい特徴があります。火山噴火の関係でしょう。

今や中高年の登山ブームですがそれに反して大学などの山岳部は部員が欠乏しています。

もうひとつ昔と違う点は登山路にやたら鎖を見かけることです。槍ヶ岳や奥穂高岳には梯子まであります。かつて本誌の表紙に、滝谷の縦走路にまで鎖が張ってあるのを見かけました。昔を知る私には驚き入る今日であると言えます。

もうひとつの山岳会 “日大山岳部の思い出” ～「日大山岳部々報1932年版」があった！～

昨年の総会で岩内さんから「泉尾文庫に日大山岳部の古い部報があるそうですよ」とお聞きした。さっそく保管されている大久保さんからその本を送ってもらった。「日本大学山岳部々報1932」と表紙に書いてある。裏表紙のイラストは底から見た登山靴にN.U 文字が描きこまれている。B5版164ページで活字組みという立派なものだ。

内容は7名の小論文、白馬岳で遭難した仲間の追悼録、部員24名の随筆、昭和6～7年の山行記録、広告と盛り沢山だ。のちにJAC名誉会長になられた初見一雄さんの指導により発行にこぎつけたと記してある。当時は学生登山が盛んで山行だけでなく会報も各学部各科で出し始めていたようだ。私が入部していた昭和14～16年ごろ競うようにして他大学の山岳部会報など買い集めていたことを思い出す。泉尾さんも東京神田の古書店でこの本を求められたのではないだろうかと推察している。

私の所有するのは「岳人1 1936年版」

実はそれまで私の所有する「岳人1 日本大学山岳部1936」が一番古いと思っていた。松田雄一さん（JAC名誉会員 日大後輩に当たる）に聞くと「部報の方が稀少本で、あと1人が持っている程度ではなかろうか」とのことだった。日大の「岳人」は商標登録していないから現在の山岳専門雑誌「岳人」とは関係がない。保有する「岳人1」は昭和11年発行で184ページ。精密な文字が鉄筆でぎっしり書かれガリバンで刷られていて先輩の努力が伝わってくる。「岳人2」は保有していない。「岳人3」は昭和32年発行で、収録されている山行記録は昭和12年～13年のもの。「岳人4」は昭和33年発行で山行記録は昭和14年～16年。いずれもガリバン刷り。活字印刷の予算もない中で、記録だけはさかのぼってでも欠かさずにとした熱意が伝わってくる。

源次郎尾根のクライミング

「岳人4」に私が登場している。旧姓平野数雄がこの年入部した51名の中に確かめられる。どの山行記録も参加者の名が載っていて懐かしい。昭和14年の第1回山行穂高岳から参加していることがわかる。2回目は劔岳生活と名づけられた山行で“劔の大將”佐伯文蔵が同行していた。きつい訓練のため新入部員の大半がこのあと部を去った。この時の源次郎尾根二峰のクライミングについては、2007年JAC広島支部総会のスピーチで触れた。（本誌24号掲載）「二峰の懸垂下降では、30mのアップザイレンをするのにマニラ麻のザイルを通し二重にたらすための鉄の輪がこしらえてありました」と話したがその信憑性が気になっていた。誰に聞くこともできない。ところが昨年夏に送られてきた「桜門山岳会（日大山岳部OB会）短信」（2009年9/11発行）に理

事長の古野淳さんがこのピン（鉄の輪）について書いておられた。「8月3日源次郎尾根に登ってきた。目的は二峰の懸垂ピンの具合を見ることでこれは戦前の日大OBが取り付けたもの。現存し現役で使用されており錆の具合もまだまだ使用できると感じた」この文章で長年のつかえがとれたような気持ちになった。

劔岳と日大山岳部

話は変わるが、昭和10年代から劔岳や劔沢小屋と日大の関係は深かった。当時から劔沢小屋のある三田平を日大はBCにしていたが昭和39年立山東面の内蔵助カールに移した。そばの内蔵助山荘は30年前の雪崩でつぶれて今は山荘跡地と呼ぶ。近くに現在の内蔵助山荘がある。「日本大学山岳部八十年の歩み」(2004年11月刊)に尾上昇氏(JAC会長)が「夏山合宿 新天地へ」と題し「ここ5、6年の夏山最盛期の劔・穂高の盛況は辛抱強い我々をしても目を背けさせる様相を呈してきた。例を劔岳三田平に取れば(略)代表的な源次郎尾根の懸垂下降は1～2時間待たされるのが普通である」と寄稿されている。近年劔沢小屋の建て替え募金に桜門山岳会の一人として私も協力させていただいた。テレビで見ると立派な小屋に生まれ変わっている。私の青春がここにあると感慨深かった。(談)

菊池典男先輩「偲ぶ会」0泊3日の旅

昭和37年卒 高橋正彦

菊池先輩(齒16年卒)と云っても関西に住んだことないOBにはそれって誰のことと思う方が多いとおもいます。何故なら先輩は生まれも育ちも、亡くなったのも西宮で貝の収拾で石垣島に出掛ける以外は生涯、西宮を愛し離れることはありませんでした。

菊池先輩は元西宮回生病院の院長の傍ら本業の医師としては慶大で医学博士号を取得される一方、病院敷地約4千坪の中に研究対象の貝の収拾家として生物好きの昭和天皇に謁見される程のその道の第一人者です。その他、地元ロータリクラブ、古式泳法の普及、自然保護と幅広く活躍された大先輩です。

その先輩がさる2013年1月30日に97歳で亡くなりました。通夜・葬儀は家族葬で済まされ、小生に連絡あった時点では生花・香典等は一切お断りということで、ただただ西宮に向かってご冥福祈るのみでした。

それから3月に入り関西の岸田君より連絡があり、西宮で菊池先生を「偲ぶ会」を4月13日(土)にごく親しい仲間30名前後で行うとの連絡が入り、かつて関西桜門山岳会として地元関西はもちろん、広島、四国在住のOBがこれも同じ敷地にある談話室(といっても菊池先輩の親しい仲間が夕方5時以降に酒飲に集まる場所)でどれだけ多くのOBがただ酒を飲んだことか東京だけでも30名は下らない。

それだけ大勢の仲間が世話になったにも関わらず、今では生きているのは鞍田先輩だけで、鞍田さんも車椅子生活で耳も遠くなり外出は不可能で、残る先輩は全て霊界へと旅立ちました。関西に残るは岸田君一人と寂しい状態で、小生としてはあれだけお世話になっていたが岸田君一人では申し訳が立たないと思い、小生も参加すると岸田君に伝えました。

折角行くなら関西に赴任して最初に菊池さんに連れてってもらった六甲山のイタリアンリッジ(国内ロッククライミング発祥の地)に登山し、その後、甲子園で銭湯に入りサッパリして午後5時から「偲ぶ会」に出席し帰ろうという計画を岸田君伝え了解を得て、12日夜、千葉から直通の高速バスで終点の三の宮に翌朝到着し岸田君と合流し、快晴のもと多くの登山者であふれる一般道を回避し沢沿いに登るが95の阪神・淡路大震災であちこちの岩場が崩れ様相が一変したようで、通行止め等の看板もあり、イタリアンリッジにはたどり着けず、一般道に戻り、登山口の出店

で乾杯し、銭湯に向かい、その後、おごそかな中にも菊池さんの人柄が語られた「偲ぶ会」で遺影に「先輩、ありがとうございました」とお礼を心で述べて、帰路につき0泊3日の実質48時間の旅は菊池さんと共にいたような充実した気分になりました。

菊池先輩は一言で云えば「後輩思いのガキ大将」ですと云うとべらんめい調かと思うかも知れませんが、品格があり、後輩にも同じ目線で会話し、小生自身も「高橋」と呼び捨てにされた記憶がありません。これからでは遅いかも知れませんが、小生も菊池先輩のように仲間から望まれる人間像を目指したいと思います。ご冥福を祈ります、合掌。



編集後記

この度無事に短信 162 号を発行することができ、寄稿にご協力いただいた先輩の皆様にお礼申し上げます。次号は8月末の発行を予定しています。ゴールデンウィークや夏休みの楽しい山行を短信に掲載させていただきたいので、文章にして、ぜひお寄せください。

なお原稿の送付先は、

メールアドレス

wakabayashiyuko@gmail.com

または住所

編集担当：原田、若林